

時代相の変化とコア・パーソナリティー

—「頑張る」日本人と「頑張らない」日本人—

天沼 香

はじめに

日本人のコア・パーソナリティーあるいはエトスとの関連のなかで私が「頑張り」「頑張る」といった語彙に着目してから既に30数年が経過している。

原始古代以降、個々の時代相のなかで、さまざまに彩られ、時に表面の主潮流となり、時には地下水脈のように伏在しながらも、各時代を通歴的に流れ、近代に入って、その社会構造の変化にともなって、伏流からメイン・カレントとなった「頑張り」という日本人のエトスは、日本近代化の精神的バックボーンとなった。

近代化を成し遂げた当時の西欧は、近代世界文明史上の中心であった。周縁たる日本は、中心たる西欧に追いつき追い越せとばかりに近代化を推進した。日本の近代化≒西欧化といわれる所以である。そのスローガンは「殖産興業」であり「富国強兵」であり「脱亜入欧」であった。

その後、日清、日露そして2度の世界大戦を経ながら日本人は良きにつけ悪きにつけ「頑張り」続けてきた。今日においても「頑張る」日本人に変わりはない。しかし、昨今、時代相の急激な変化の中で、日本人の「頑張り」に対するスタンスに微妙な変化が訪れていることも又、事実である。本稿では、この「頑張り」に関する変化している部分と不変な部分との関連を探ってみようとする。

1. 「頑張る」を解釈する

日本人の生活の諸々の場面で、「頑張る」の各活用形「ら・り・る・る・れ・れ」は実によく用いられる。国民的用語といっても過言ではあるまい。各種マス・メディアにも「頑張り」は頻繁に登場する。例えば新聞の見出しにも、足繁くこの語が起用される。「頑張り」という言葉が日本人の耳目を引くからに他ならない。こうした状況は30数年前から何ら変わっていない。以下に少々、例示しておこう。

2000年11月4日、ギリシャのアテネ郊外で日本人観光客を乗せたバスが乗っ取られた。解放を知らせる新聞の見出しは「恐怖の車中8時間 手握って『頑張ろう』⁽¹⁾」。《運命共同体となったバス中の人々の連帯と励まし合いの意識を端的に示す言葉として「頑張ろう」》

同年11月8日、日本赤軍の重信房子が逮捕された。その続報の見出しは「帰国何の目的で… 笑み浮かべ『がんばる』⁽²⁾」。《意味不明ながら、彼女の何らかの意志表明を端的に示す言葉として「がんばる」》

同年12月26日、同年5月の17歳の高校生による夫婦殺傷事件に関する名古屋家裁の最終審判が出た。優等生だったという少年の「人を殺してみたかった」という犯行動機に、世間が動揺した事件だったが、その審判を伝える新聞の見出しは、「『頑張ってきます』

少年、深く頭下げ 裁判官の言葉にうなずく⁽³⁾」というものだった。《意味不明ながら、少年の「やり直してきます」といった反省の念を示しているように思われる言葉として「頑張ってきました」》

2001年1月早々、鳥取県米子市で生まれたばかりの赤ちゃんが病院から連れ去られた。14日、容疑者が逮捕されたことを報じる見出しは、「雪の朗報『よく頑張った』『早く授乳させたい』 通じた祈り 喜びの両親⁽⁴⁾。《「よくぞ生きていてくれた」という両親の喜びの気持ちを示す言葉として「よく頑張った」》

同年1月、KSD汚職で逮捕された小山孝雄参院議員関連の記事の見出し。「筋書き通り？ 連携質問 『職人大学開設せひ』 古関被告『頑張ってくれている』⁽⁵⁾。《「こちらの思惑通り動いてくれている」という意味合いで「頑張ってくれている」》

サッカーJリーグのチームが川崎市から東京都にホームを移す（2001年）と、稲城市は支援を表明。それを報じる見出しは「頑張れヴェルディ⁽⁶⁾。《単純明快に当該グループ、チーム、個人等を応援する言葉として「頑張れ」》

「第二回『生命を見つめる』フォトコンテスト」の入賞作品のひとつ、老人がパン食べ競争で奮闘しているユーモラスな写真のタイトルが「がんばって⁽⁷⁾。《おじいさんの生に対する共感、思いやりの念が込められた言葉として「がんばって」》

米国の原子力潜水艦によって沈没させられた愛媛県立宇和島水産高校の実習船えひめ丸に乗っていた兄を捜すためにハワイに渡った弟の話を書いた紙面は「俊介君がんばって⁽⁸⁾。《不慮の事故の犠牲となった兄を求めて旅立った弟に対する万感の思いが込められた言葉として「がんばって」(ただし、そういわれたって俊介君だって「何をどう頑張ればよいのか」わかったものではない。悲しい思いのなかでは、この語は虚しく、うっとうしく響くだけかもしれない)》

都立高校の受験シーズン。三宅島雄山噴火のため避難が長期化している島民の子弟の受験への対応を報ずる紙面は、「三宅高受験 島出身者の半分に 寂しさと希望と…それぞれの春挑戦 『お互い頑張ろう』…⁽⁹⁾。《同じ境遇にある者同士の励まし合い、エールの交歓の言葉として「お互い頑張ろう」》

地盤沈下が続く東京、吉祥寺を含む地域の「女性のための地域生活情報紙」は一面トップで「がんばってね！ 吉祥寺⁽¹⁰⁾。《地域を擬人化して、その再びの繁栄を願う言葉として「がんばってね」》

中学生の時に1型糖尿病を発症し、それを克服して、糖尿病患者のために医師になることを決意した女性に関する記事の見出しは、「患者と一緒に闘病中 夢かなえた『頑張り屋』⁽¹¹⁾。《努力して自らの夢を実現した女性を賛美する言葉として「頑張り屋」》

コロンビアで人質になっている日本人を励ますために地元ラジオ局員が励ましの言葉を送ったことを報ずる記事「〇〇さんへ 日本語で『頑張って』⁽¹²⁾。《幾多の人びとが麻薬密売組織(?)の人質になっている同地で、日本人人質に向けては、「耐え抜いて」といったニュアンスで日本語で「頑張って」》

提訴から16年、福岡高裁における控訴審判決で国に勝訴した「じん肺訴訟」。これを報じる記事の見出しは、「『がんばったかいある』抱き合い喜ぶ原告⁽¹³⁾。《「国を相手に耐えてやり抜いた成果があった」という感慨を示す言葉として「がんばったかいある」》

2001年夏、多数の死傷者を出した兵庫県明石市の花火大会の続報は、幼い妹（8歳）を失った姉（9歳）のことを報じ、彼女の妹が生命を奪われた歩道橋に書いた言葉をそのまま掲載、「〇〇〇へ 天国にいても元気ががんばってネ！ おねえちゃんより⁽¹⁴⁾。《幼い妹を亡くした幼い姉のいたたまれない、どうしてあげたらいいのかわからない気持ちを表現した「がんばってネ！」》

これまで掲げてきた「頑張り」は、1例を除けば、20世紀末年末から21世紀初年半ば

にかけて、日本国内3紙の大きな見出しに登場した「頑張り」である。それも世間の耳目を引いた事件や催しに関係する記事の見出しに限定されている。もっと小さな記事の見出しや文中には、それこそ数え切れないほどの「頑張り」「頑張る」がちりばめられているのだ。そして、それらの「頑張り」の意味内容は個々で異なっている（《 》内の解釈参照）。この語彙がいかにか融通無礙に用いられているか、一目瞭然である。

偶然ではあろうが、主要紙といわれる某紙の2001年9月の月間には社説の見出しに2度までも「頑張り」が起用されている。いわく「がんばれニューヨーク⁽¹⁵⁾」。またいわく「頑張り過ぎて墓穴掘る⁽¹⁶⁾」。

前者の社説は、9月11日、ハイジャックされた4機の米国の民間航空機が、ニューヨークの世界貿易センタービルや、ワシントンDCの国防総省に相次いで突込み、多大な犠牲者を出したテロ事件後の混乱の渦中にあるニューヨークそして米国の諸状況を描いている。そして「外部には唯一の超大国としての振る舞いが批判されがちな米国だが、その社会には様々な民族や文化を受け入れる懐の大きさがある⁽¹⁷⁾」同国の惨事に同情し、「米国の悲劇はひとつごとではない。私たちも、できるだけのことをしたい⁽¹⁸⁾」と米国にエールを送って文を締めくくる。

別にそれだけの文章で、取り立てて「がんばれニューヨーク」という内容を伴った説ではない。「がんばれ」という言葉の語感の響きの良さに引かれて付けられたタイトルであろう。何をどうしたらどうか、かにをこうしたらどうか、といった具体的かつ建設的な見解が開陳されているわけでもない。しかも「がんばれ」と督励されているのは「ニューヨーク」という擬人化された大都市である。

ニューヨーク市民が、あるいは被災者の家族がこれを読んだら「『がんばれニューヨーク』っていうけど、一体何をどうやって頑張ればいいんだ」といら立つに相違ない。もっとも、「頑張る」という語彙は英語にはない

から、この場合は'Good luck, New York',あるいは'God bless New York'とでも訳され、原文の押しつけがましい命令形のニュアンスは消え去るであろうけれども。

1995年1月17日、大地震が神戸を始め兵庫県各地を襲い、大きな被害をもたらし6千名に上る死者を出した。その際にも、被災地から遠く離れた安全なところから、悪意はないけれどもあまりに安易に「頑張れ、神戸」「被災地の皆さん、頑張ってください」といった声が数多く、被災者の人びとに寄せられた。こうしたマスコミ等の決まり文句に対して、多くの被災者は、意を強くするどころか、「頑張れへんところに、高い所から『頑張れ』って言われたかて、一体、何をどう『頑張っ』たらええねん」といった反発心を抱いた⁽¹⁹⁾。

「がんばれニューヨーク」も「がんばれ神戸」も、空虚で無責任な言辞と言わざるをえない。1995年の大震災後のあまりにいい加減な安全地帯からの「頑張れ」「頑張っ」の横行に対して私は「『頑張る日本人』再考の時 他者顧みる視点こそ大切」という一文を某紙に呈したことがある⁽²⁰⁾。詳しくは、その文章に譲るが、同じ「頑張れ」「頑張っ」でも、同じ境遇にある人同士で交わす、あるいはボランティア等で同じ地平に立って物事を見ようとしている人たちから発せられるその言葉は受容される。

なぜなら、それは押しつけがましい命令ではなく、同じ状況下におかれた人同士の「共に頑張ろう」という、連帯の表明のニュアンスを有していたし、それなりに説得的だからである。地元のボランティア・グループの作ったジャケット、Tシャツ等に刻まれた言葉も「がんばる心はつぶれへん」だった。

後者の社説は、2001年7月の参院選で当選した元郵政官僚高祖憲治の辞職に関するものだが、やはり見出し以外に「頑張り」の語は出てこない。ただ、この元官僚は、選挙戦の最中は「高祖（酵素）パワー全開で頑張ってます」などと、酵素が気を悪くしそうなギャグで郵政民営化阻止を訴えてきた人物である。

それこそ見出しの通り「頑張り過ぎ」で視野狭窄に陥り、結局、自分たちの組織と既得権を守り抜くために「郵政一家」ぐるみの選挙違反へと突走ってしまったのだ。

「頑張り」が過ぎると、広く周囲を見渡すことができなくなり、自己中心的になり、他者を顧みること、慮ることができなくなる。ただ目的達成のために集中的に力を傾注する。

こうして元官僚の陣営は、近畿郵政局長はじめ多くの公職選挙法違反容疑での逮捕者を出し、その責任をとるというかたちで高祖は詰め腹を切らされた。《こうしてみると、先の「がんばれニューヨーク」という極めて情緒的かつ無責任な表題とは異なり、こちらの「頑張り過ぎて墓穴掘る」という表題は誠に適切な「寸鉄、人を殺す」表現といえよう》

以上、みてきたように色々なケースで如何ようにも融通無礙に使用しうるのが「頑張り」「頑張る」という語彙、ということのできるのである。

2. 「頑張る」から「頑張らない」へ

商品の宣伝、広告、コマーシャル等は、当該商品の販売促進を企図したものであるから、当然、そこで用いられる言葉は、消費者に好意をもって迎えられるものに限られる（時には人びとに強いインパクトを与えるために逆に忌み嫌われている言葉が敢えて使われることもあるが、それは稀であり、結果としてそうした奇策は失敗に帰することのほうが多い）。

その宣伝、広告にも、これまた相変わらず「頑張り」は数多く登場する⁽²¹⁾。ここでも少々アト・ランダムにその実例を見ておこう。

出版社に勤める32歳の独身女性の日常と恋と仕事を描いた佳作「ブリジット・ジョーンズの日記」(原題 'Bridget Jones's Diary', レニー・ゼルウィガー主演、コリン・ファース、ヒュー・グラント共演、監督シャロン・マグワイア=ユニバーサル映画)の日本公開に際してのキャッチ・コピーは、「恋に仕事に、頑張っているけど満たされない… “ブリ

ジット” はあなた自身——」と囁く。いかにも日本の30代の独身女性の琴線に触れるような文言といえよう。

さる健康飲料は、「パパ、ガンバッテ!」。さる健康栄養食品も、「がんばって働くあなたに〇〇〇」。さる缶飲料は、「今年は、〇〇〇 がんばってコート」と広告、飲んでシールをはがして応募すると「がんばってコート」や「がんばってキャップ」が当たる、と宣伝する。

さる肥満を解消したり、脚線美を造るための教室のチラシは、すっきりとスリムな女性のモデルに「一人じゃないから頑張れた」と語らせる。人材派遣会社は、「頑張るあなたをバックアップ。派遣で輝く自分発見!」と宣う。

食用油の広告。息子が父親に向かって「頑張ってきたんだから、そろそろゆっくりしたら?」。衛生関係の会社の広告。「自分でがんばるリハビリのために、ひとりでつけられる尿とりパッドができました」。

小学生や中学生向けの新聞の宣伝。「〇〇・〇〇は勉強も学校生活もガンバルみんなを応援します」。大学受験のための予備校は、「がんばれ受験生」。現役のための塾は、「がんばれ高校3年生」。幼児や小学生向けの塾まで「…がんばり教室」で、参加すると「がんばりセット」プレゼントとくる。さる英語教材のチャッチ・コピーは「がんばらないで英語が身につく」。「楽しいから頑張らなくても身につく。頑張らないからこそ身につく」と頑張らなくても英語力が身につくことを強調する。しかし、成果が挙げられた会員の声の欄では「これがらもがんばります」と言わせる。

各家々のポストに勝手に投げ込まれている新卒の風俗産業の小さなチラシにまで、「100点取るようにがんばります」。かたや内閣官房・総務省の政府公報の文言も「誰にだって頑張れる舞台がある」。「未来を担う青少年の健全な育成のために」ということで、舞台に立つ若者たちに「…いま、気分だけは主役。ほんの少しの拍手でもいい。誰かの声援があ

るから、私は全力でがんばれるんだ」と言わせて、若者たちへの支援を呼びかけている。

全国地域情報発信推進協議会の岩手のキャンペーンは、「がんばらない宣伝いわて」⁽²²⁾。宮古市松月海岸に椎名誠を立たせて、「何かしていなければ落ち着かない。つねにがんばっていないと不安になる。そんなの変だぜ、現代人諸君。僕が大好きな岩手に出かけてごらん。気分のいい風と空と雲が、きらきら、ふわふわ、笑って待っているから」と発想の転換を説かせ、人びとを岩手へと誘う。

その他、宣伝、広告、コマーシャルにおける「頑張り」は枚挙に暇がない。これは、「頑張り」「頑張る」という語感が日本人には肯定的に心地よく響くことを意味しよう。しかし他方、昨今では「頑張らない」と「頑張る」ことを否定するかたちの表現も見られるようになってきた。これは以前では考えられなかったことである。

この状況は、バブル経済崩壊後に、顕在化してきたように思われる。戦後復興期、高度経済成長期、バブル経済期と20世紀後半の長きにわたって「頑張り」続けてきた、あるいは「頑張り」過ぎてきた、あるいはまた「頑張らされ」てきた日本人が、バブル経済崩壊とともに、これまでの「頑張り」一辺倒だった生活に疑問を呈し始めたせいかもしれない。

何でもかんでもただ遮二無二「頑張って」さえいればよかった時代の終焉を、無意識のうちにも多くの日本人が実感し始めたのだ。こうした実感を背景に、『いい女は頑張らない』と題する書物⁽²³⁾、『がんばらない』というタイトルの書物⁽²⁴⁾などが公刊され、好評を博した。『どうして「まじめな男」「頑張る女」が満たされないのか』という、「頑張り」すぎず、ゆったり人生を送ることを説く書⁽²⁵⁾も刊行された。雑誌でも「がんばります！PTA」⁽²⁶⁾などという主題とともに、「今、『頑張りすぎない』がイイ感じ」⁽²⁷⁾と題して特集が組まれたりしている。

我われ日本人は従前通り「頑張る」ことに

意義を見出しながらも、20世紀末から21世紀初頭にかけての時期において「頑張らない」ことにも意義を見出し始めているのかもしれない。

3. 巷の「頑張り」論

a. 梶原しげるの「頑張り」論から考える

某ラジオ放送の「チャレンジ!〇〇放送局」なる番組で、「言われて嫌な言葉は何ですか」という問いを發したところ、「頑張って」という言葉だという答えが多数、返ってきたという⁽²⁸⁾。

同番組パーソナリティーの梶原しげるは、「育児の苦勞を夫に訴えても、『頑張って!』の一言でおしまい。頑張ってもうまくいかないから、相談しているのに⁽²⁹⁾」といった子育て中の主婦の話や次のような上岡龍太郎の話を紹介する。

「街で僕のこちとを見つけて『よ!上岡さん頑張って』言う酔っぱらいおるやろ。そんなとき『お前が頑張れ。こんなとこでふらふらしてて、妻子は泣いてるぞ』って言ってやるんや。こっちはお前に言われんかて、頑張るとるわい⁽³⁰⁾」。

梶原は、自分が大学院で学んでいるカウンセリングの講義でも悩みを抱える人に対して「頑張って」と言うのは禁句とされているのに、ついついさまざまな局面で「頑張って」と言ってしまうと告白する。「頑張れば何とでもなった時代が終わり、頑張ってもどうにもならないことの多い、この十年余り⁽³¹⁾…」と彼は「頑張り」を巡る状況認識を開陳するが、これは興味深い指摘である。

先述のように戦後長らく、経済効率万能主義のもと、モーレツ社員や企業戦士が身を粉にして「頑張って」きた結果、日本は驚異的な経済発展を遂げたが、それも1990年代前半で頭打ちとなり、その反動で経済の底冷え状態は長引いている。こうしたなかで我われ日本人の間では、ひたすら「頑張って」きたことへの反省のような意識が生じている。

「頑張った」結果がこれなのか、という無力感や悔恨の念をもつ人びとすら少なくない。若い世代においては、「頑張ったからって、どうなるわけじゃなし…⁽³²⁾」といった覚めた表現で「頑張り」を拒む者も多い。所謂フリーターと称される若者が多数、存在することもこうした意識と無関係ではあるまい。

若年層では、「頑張る」ことは、「ダサイこと」、「カッコ良くないこと」、(自分たちには)「カンケイナイこと」といった受けとめ方すらけっして少数派ではない。「なにを頑張っちゃって…」という具合に、何かに打ち込んで「頑張って」いる人をシニカルに眺めるような風潮すら見受けられる。

しかし、もう一步、踏み込んで彼ら、彼女たちと話してみると、表面的には虚無的で諦念に支配されているようにみえても、心底においては「やっぱり頑張ってる人はすごい」「自分にも機会が与えられれば頑張ってみたい」といった本音が見え隠れしてくる⁽³³⁾。

「頑張り」に対して冷笑的でありながら、「頑張り」に対する羨望もある若者たちの本音は、「頑張りたいけど、今の状況では頑張りようがない。もっとチャンスが欲しい」といったところにあるのかもしれない。

b. 西沢美枝の「頑張り」論から考える

1998年3月、長野冬期五輪に引き続いて同地で「アートパラリンピック長野」(心身に不自由な部分がある人たちの芸術祭)が開催された。この展覧会で、西沢美枝書の「がんばらない」が入選した。この書は、「かりがね学園」という知的障害者施設の展覧会にも展示され、多くの精神的、肉体的に苦境にある人びとに感銘を与えていた。作家の深沢夏衣によれば、同芸術祭審査委員のはたよしこは「五輪でもなんでも、がんばるのが大好きな日本人に、肩の力を抜く大切さを考えさせてくれる⁽³⁴⁾」として西沢の書を高く評価したという。

はたの言う通りの「頑張る」日本人に、西沢の書「がんばらない」は意表を衝く感興を

与える力を持っている。「頑張る」のに疲れても、なかなか正面切ってそうは言えなかった我われ日本人に、ふっと本音を漏らす大切さ、ふっと立ち止まってみる大切さ、忙しさを売りものにする虚しさとこっけいさ、何もしていないでいる時間の大切さを示して余りある雄渾な書といえよう。諏訪中央病院長、鎌田實もこの書に感動して、自らの著作に『がんばらない』というタイトルを付けたものと思われる。

c. 王薇の「頑張り」論から考える

王薇という中国内陸部の黄土高原出身の女性は、現在、日本の埼玉県坂戸市に住んでいる。穏やかな気候風土の黄土高原で育った彼女は日本に住んで初めて台風、地震、火山噴火等を体験し、こう語る。「日本人は、こんなすごい台風が来る環境で育ったからこそ、どんな辛抱も出来るのでしょうか。だから日本人はいつもわごとのように『がんばる、がんばる』を連発するのでしょうか⁽³⁵⁾」。

日本で生活するなかで、彼女はよほど多くの自分が接する人びとの「頑張り」に接し、また頻繁にその語が発されるのを耳にしたのであろう。その事実だけでも彼女は「頑張る」日本人の観察者として貴重な存在だ。

が、それに止まらず彼女は、その日本人の「頑張り」を台風等の天変地異にさらされやすい日本の気候風土に絡ませて論じている。風土論的民族性論といえよう。しかも、そこには自らが生まれ育った中国の高原での「毎日、何も心配しないで楽しく過ごした⁽³⁶⁾」穏やかな生活との比較考察も取り入れられている。

思いつき、単なる印象・感想などとして一笑に付することは簡単だ。が、こうした異文化出身者の日本での「生活者としての眼」には捨て難い、文化理解に資するなにものが宿っていると私は考えている。

d. 新聞投書の「頑張り」論から考える

新潟県小千谷市在住の主婦の女性は、「頑

張れ』という言葉が気楽に使いにくくなったのは、いつからだろう⁽³⁷⁾』という疑問を呈する。「こんなに頑張っているのに、『頑張れ』と言われるとつらい」「全力で戦っている人に、『頑張れ』と励ます…(の)は禁句」といった例を挙げながら、では一体いつ誰に対してなら、この言葉を用いてもよいのかと戸惑う。

彼女は、自分としては試合や試験に臨む人に対して「頑張れ」と言いたいけれども「聞いた人が重荷になるのなら、言葉をのみ込むしかない⁽³⁸⁾』とする。

しかし、「『頑張れ』は、最後まであきらめるな、手を抜くな、と励まして、思いやる言葉』であるとする彼女は、その語が使いにくくなってきたことを残念に思い、「『頑張れ』という言葉にはいい意味のまま生き残ってもらいたい。『頑張れ』よ、頑張れ!⁽³⁹⁾』と「頑張れ」にエールを送るのである。

彼女の「いつから『頑張れ』という言葉が使いにくくなってしまったのだろう」という嘆息に対して、私は若干の責任を負うべきかもしれない。拙著『「頑張れ」の構造』公刊後、多数の既知・未知の教育関係者その他の方々から「あの本を読んでから、以前のように気軽に『頑張れ』と言いにくくなってしまった」という話や便りが私に寄せられていたからである。

彼女の投書に対して5日後には2通の返答的投書が掲載されている。1つ目は北海道小樽市の無職の男性からのものだ。元高校教師の彼は、新米の頃を除いて生徒に対して「頑張れ」と言ったことはないという。この言葉が、落ち込んでいる生徒らには「凶器」になるからと認識してのことである。

さらに彼は、15年来、重度のアルツハイマー病の妻を介護するなかで、教え子や知人たちから「頑張れ」という手紙をもらおうと「これ以上、どう頑張れどいうのか」と思ってしまう。「受験、スポーツ、病気など何でも、必死で『頑張っている』当人に、どうして他人が『頑張れ』と言えるのでしょうか

か⁽⁴⁰⁾』という彼の声は、落ち込んでいる人に「頑張れ」は禁句という声ともども「頑張れ」反対派の意見を集約したものといえる。

「頑張る」に「頑張れ」というのは、「あなたに言われなくたって、私は既に頑張っている」という反発を招きかねない。

「頑張れ」なくて落ち込んでいる人に「頑張れ」というのは、「頑張れないから落ち込んでいるのに、どう頑張ればよいのだ」という反発を招きかねない。

やはり「頑張れ」は他者に対しては、あまり軽々しく使ってはならない言葉であるといわざるをえない。「頑張れ」は第一義的には、あくまで自らに向けて、自らを鼓舞すべく発される言葉(我ニ張レ→我ン張レ)なのである。第二義的には、転じてせいぜい気心の知れた他者に対して発される言葉といえよう。その限りにおいては何ら非難される言葉ではないのである。

ちなみに2つ目の返答は、東京都東村山市の理学療法士の女性からのもので、自分も「自分に余裕のあるときには励ましとして聞ける」けれども、「ギリギリまで頑張っているときには、『まだ認めてもらえないのか』と思ってしま⁽⁴¹⁾』うというものだった。

しかし家族等、親しい間柄のなかで努力したことに対して「頑張ったね」と言い合うことは素晴らしいと彼女は強調する⁽⁴²⁾。過去形になっているということは、良かれ悪しかれ結果に対しての「ねぎらい」のようなニュアンスをもって、「頑張ったね」という言葉を発することを意味するのであろう。

これは確かに親しい人同士のバーバル・コミュニケーションとして、互いを認め合う重要な意味合いを有する言葉といえるかもしれない。「頑張れ」が未来に向けての「頑張る」の命令形であるのに対して、「頑張った」は結果ないしは結果に至るプロセスに対して発せられる「頑張る」の過去形であるから、その語義に「称賛」や「ねぎらい」は含意されるにせよ、前者のような「押し付けがましさ」は消去されるからである。

e. 君原健二の「頑張り」論から考える

42.195キロメートルを駆け抜けるマラソンは、短距離走よりは訓練——「頑張り」の意味合いが大きい。君原健二は、そのマラソン界で、高校までは無名だったにもかかわらず、その後、八幡製鐵の社員としての仕事と両立させながら練習に励み、1960年代にはマラソン界の第一人者となり、1968年メキシコ五輪では銀メダルを獲得した。

1964年東京五輪後は、一時、同マラソンで銅メダルの円谷幸吉に世間の耳目が移ったが、その円谷は「メキシコ五輪でも頑張り」という世間の声の重圧に耐えかねて自死を敢行する。実は、この五輪の際、円谷以上に期待されていたのが君原だった。彼は当時を次のように回想している。

「五輪が近づくにつれ、自分に対する期待が膨れ上がっていることは肌で感じてました。でもすぎるような眼差しで頑張ってくださいと言われると、ガックリときました…⁽⁴³⁾」。

こうした君原の心境を、かつての日本新体操のエース、山崎浩子は「これ以上頑張りないぐらい頑張ってた彼にとっては、あまりにも酷な声援だった」と解説する⁽⁴⁴⁾。

東京五輪で八位に終わった君原は注目度が少し下がったなかで、「結果よりも、その結果に至るまで、どう頑張ってきたか。その過程を…大事な評価基準として⁽⁴⁵⁾」、仕事にも練習にも励み、1966年ボストンマラソンで優勝、メキシコ五輪で2位と輝かしい実績を積み重ねていった。

出場49回のフルマラソン全回完走という「頑張り屋」の権化のような彼は、還暦を迎えて、「頑張り」の連続だったそれまでの人生を思い起こしながら、「六十歳からの人生は、それほどがむしゃらに頑張らず、ゆとりを持ったなかで、充実した人生を過ごしていきたい…⁽⁴⁶⁾」と語る。

こうした君原の「頑張り」関連の発言は、この語彙の特徴を的確に示すものとなっている。再確認しておこう。

①頑張ってる他者に対して「頑張り」というのは僭越であり、無礼ですらある。頑張りない状況下にある他者に対して「頑張り」というのも酷薄であり、逆効果でしかない。前者にせよ、後者にせよ、他者を「これ以上、どう頑張ればよいのだ」という精神状態に陥らせてしまいかねない。「頑張り」は基本的には自らを元気付け、鼓舞するための言葉なのである。

自らは別置しておいて、当事者に対して「頑張り」というのは、自他の関係性の希薄さの表明とも言えるような、突き放した感じを与えることもある。したがって、他者に対して「頑張り」といえるとするれば、それは既知の親しい間柄の他者に限られる。

未知の、あるいは然程、親しくもない、その心境も計りえない他者に対するこの言葉は、悪意はないにせよ無責任な放言的言辞としか聞こえないこともある。君原も多くのすぎるような眼差しの「頑張り」にそれを感じたのである。

②結果そのものよりも、その結果に至までの「頑張り」の過程を重視するという君原の思考そして志向は、これまた「頑張り」という言葉の特性を如何なく表明している。

無規定的で融通無礙なだけに極めて曖昧な語彙といわざるをえない「頑張り」は、時に合目的性をもって発揮されるのではなく、「頑張り」こと事態が目的化することを許容する。したがって頑張っているプロセスそのものが評価の対象となりうる。たとえ目的は達成することができなくても、「頑張った」ことで他者から評価されたり、自身も満足することができる。

「結果がすべて」的な考えが当たり前となっている欧米的思考では考えられない「プロセス重視」の思考といえよう。このような結果に至るまでの過程における「頑張り」重視の志向は、スポーツの練習・訓練等に顕著にみられるばかりではなく、それこそ日本人の行動原理の一角を成しているといえよう。

別稿『『頑張り』再考』で触れる中根千枝の「能力差」よりも「努力差」を重視する日本という観点とも関連する事項である。

③若い頃、自らは懸命に「頑張り」ながら生きてきたのに、他者からの「頑張れ」「頑張って」という声援には愕然としていた君原が、還暦を迎えて、「それほどがむしゃらに頑張らず、ゆとりを持っ」て生きようという感懐を持った。これは彼が自らの心中にも宿る日本人のコア・パーソナリティーとしての「頑張り」を反面教師的に再認識して、これからはそんなには「頑張らない」で生きていこうと考えたことを意味しよう。

仕事と競技双方に人一倍「頑張っ」た君原であり、他者からの「頑張れ」には違和感を覚えた経験を有する君原であるだけに、「頑張る」ことのプラス・マイナス両面、「頑張らない」ことのプラス・マイナス両面を人生の軌跡のなかで明解に認識したのだ。

また1941年、福岡小倉生まれの君原の人生の青春期そして朱夏の頃は、敗戦日本が戦後復興、高度経済成長を遂げようとしていた時期に重なる。日本中が復興とさらなる経済発展のために、それこそがむしゃらに「頑張っ」ていた時期である。こうした時代相のなかで君原が自らの職分に関して人一倍「頑張ろう」としたことは想像に難くない。

そして、自らが白秋期に入る頃、20世紀末から21世紀初頭にかけて日本のバブル経済は泡と消え、構造不況のもと、右肩上がりの経済成長など夢のまた夢という状況下、個々の人びとは「頑張り」続けてきた前半生をこれで良かったのだろうか振り返る。

先にも触れたように、「頑張る」から「頑張らない」へと日本人がシフトし始めた所以である。こうした状況の変化、時の流れと、君原の思考や志向も無関係ではあるまい。

4. インターネット上での拙論への言及から考える

インターネットで、「天沼香」をキーワードとして入力して検索すると、いくつもの検索結果が登場してくるが、そのなかでやはり数多く見られるのは、「頑張り」と関連するものである。

たとえば、島根大学における2001年度開講科目「日本の文化と社会Ⅱ——日本人の行動原理——」(Culture and Society in Japan Ⅱ—— Japanese action principle ——)の教科書として拙著『『頑張り』の構造』が用いられているなどという思いがけない結果に遭遇したりする。

同科目の担当教授、堀内好浩は、授業内容の要旨を次のように掲げている。「第2次世界大戦後の驚異的な復興、それに続くさまざまな高度経済成長、さらには現今の集中豪雨的な輸出に伴う欧米その他の諸国との貿易摩擦、こういった一つ一つの歴史的な状況の背後に、『頑張り』の精神がみとれる。

他民族にはない『頑張り』という語彙を基に、日本人の『頑張り』の起源、『頑張り』の語義の変遷、さまざまな『頑張り』を考察し『頑張り』を日本人の行動原理の核の一つと考え、…日本民族のコア・パーソナリティーを論じたい⁽⁴⁷⁾」。

そうして堀内は授業計画では、ほぼ拙著の構成通りに「頑張り」に関して論証、考察を進めるとしている。拙論を全面的に肯定的に論じながら、日本人のコア・パーソナリティーとしての「頑張り」の二面性、それゆえの危険性を指摘して半期の講義を終了するという計画は、まさに著者の意図するところを的確に読み込んだうえで作成されたものと思われる。

また、「頑張る」という言葉は、「根性」といった類の語彙とも無関係ではありえないせいか、体育・スポーツ関係者の間でも関心をもって語られる言葉らしい。インターネット上でも拙論に絡めて、バスケットボールの指

導者と思われる人物が次のような発言をしている。

どこからどこまでが地の文で、どこからどこまでが引用文なのかが判然としないが、ともかく、少し長くなるけれども関連する部分を引き出しておこう。

「今年も卒業する学生に『卒業後も頑張れよ』と激励した。このように私たちは自分の決意の表明や他の人を応援するとき、『頑張り』という言葉をよく口にする。

『頑張り』という言葉は日本独自ののもとは『我を張る』の意味であったが、明治以降に『耐えてやり抜く』に変化した。この『頑張り』という言葉が一躍脚光を浴びるきっかけとなったのが、昭和11年のベルリンオリンピックのラジオ放送『前畑ガンバレ』であった（『「頑張り」の構造』天沼香）。

『前畑ガンバレ』でわかるように『頑張り』とは勝つために自己の持てる力の全てを發揮することである。そしてスポーツの場面ばかりでなく日常生活でも頻繁に使われるようになった。

私たちは普段、何気なく『頑張り』という言葉を使っているが、これは方向性が感じられる。それは勝つことを目的とした外への「頑張り」と、自己のベストの發揮に重点をおいた内への「頑張り」である。

スポーツの場合、外への『頑張り』を過剰に意識すると、『勝つと思うな、思えば負けよ』の歌のごとく、かえってマイナスの状況を招くことが多い。逆に内への『頑張り』を重視したとき、最高のパフォーマンスを發揮する傾向が見られる。

私たちはこれからも頑張りつづけるだろう。何のための頑張りかを考えながら。

中桐伸吾教授（大谷大学・スポーツ心理学）
AERA 4. 30号より

私は君たちが持っている能力を十分に發揮しているとは思っていない。まわりの先生方もこう見ている。もっと自分の内へ頑張れば、

能力を100%發揮できると思う。そのためには、もっと自分に厳しくすることが必要である。最もダメなのは、『頑張り』が『我を張る』、つまりわがままな意地っ張りに終わることだ。残された時間、素直に頑張ってみよう⁽⁴⁸⁾」。

この拙論や、スポーツ心理学者、中桐伸吾の論を引用しながらのスポーツ関係者の「頑張り」論は、「頑張り」を「ソト」へ向けての「頑張り」と「ウチ」に向けての「頑張り」とに二分し、後者を重視する。すなわち、スポーツにおいて、他者との競争、競り合いに過度に重点を置いた「ソト」に向けた「頑張り」は当人にとって時にマイナスに作用する。

他方、自らの状態を最高のところへもって行ってプレーをすることに力点を置いた「ウチ」に向けた「頑張り」は当人にとってプラスに作用することが多い、というのである。

自己体験および実際の指導体験から導き出された論として傾聴に値する。私も「頑張り」に関して、これとは異なった観点からではあるが、それが「ソト」に向けて發揮される場合と「ウチ」に向けて發揮される場合とに分類したことがある⁽⁴⁹⁾。

東京大学大学院の横田匡俊は、1992年バルセロナ五輪銀メダリストにして1996年アトランタ五輪銅メダリストの女子マラソンの有森裕子の「燃え尽き症候群（バーンアウト・シンドローム）」について論じるなかで、次のようなかたちで拙論に言及している。

「天沼（1987）は、日本人の『頑張り』について『本来、独立的・個人的行為である「頑張る」が、同調的・集团的行為に敷衍して用いられるようになったとき、日本風土の中でこの語は盤石の地位を確立したといえよう。それは、同調性や集団主義といった日本人の行動の規範に『頑張る』の語が見事に適合したことを意味するからである。…』と述べている。「頑張る」が同調的・集团的行為であるということは、頑張れない者には集団

からの逸脱者として『落ちこぼれ』のラベリングが成されるということである。天沼は同時に、『いかんせんこの「頑張り」という語には明確に方向性がない。可変的である。したがって、ただただ頑張っているうちに、いつの間にか主体的思考はなくなってしまっていて、他の何者かの思うがままになっているという事態を招来しやすい』と述べているが、これは継続を促すメッセージとしてのガンバリズムの役割を考えるに際して、実に興味深い考察である。その曖昧さゆえに方向性や主体性、目的を奪うことになりかねないガンバリズムは、社会病理を隠蔽し、スポーツの継続を促すにはうってつけの規範であるといえる。

以上のような観点をふまえると“燃え尽き症候群を克服し、見事銅メダルを獲得した有森選手”というメッセージは、スポーツを続けることのすばらしさ、頑張り続けることの素晴らしいさを訴えているようにも聞こえる。元来、医療スタッフに認められた情緒的・身体的消耗として報告された燃え尽き症候群⁽⁵⁰⁾は、むしろガンバリズムに対する警告となりうる可能性を持つ概念であった。しかし実体なき曖昧さゆえに、その姿を変え意図的に利用することが可能となってしまった。(後略)⁽⁵¹⁾」。

横田は、拙論を援用するなかで、「頑張り」は「同調的、集団的行為である」から、頑張れない者は集団から逸脱者とされる、としているが、これは曲解である。私は、時にスポーツの世界その他で、(共に)「頑張ろう」と同一集団内の他者同士が結束して「ソト」に当たろうとする事例が多々見受けられるという事実に着目し、その事実は本来的には集団(全体)に対する個の背反的行為であった「頑張り」が、集団(全体)の営為にまで拡大されることもあることを意味するという指摘をしたまでである。

やはり第一義的には「頑張り」という営為は個に付随するものだが、少なからず、それが全体の営為にも敷衍されて用いられるよう

になったことが日本語の語彙としての「頑張り」「頑張る」の立場をよりポピュラーなものにしたことに言及したまでなのだ。したがって「頑張る」が「同調的・集団的行為である」と断定するのは、その語の派生的な一面を、全面として捉えることとなるので正解とはいえないと言わざるをえない。

けれども、この論のなかで横田が言わんとするところの主眼は、私が引用した彼の文章の最後の部分である。すなわち「燃え尽き症候群」は「ガンバリズム」に対する警告たりうるという有用性を持ち合わせていたにもかかわらず、その曖昧さゆえに(この曖昧さという点においては「頑張り(ズム)」も人後に落ちない)、それは時に美談とされ、「ガンバリズムと共演し、スポーツの継続を促すメッセージとして用いられ⁽⁵²⁾」ることになると主張する部分である。こうした指摘は、スポーツそしてスポーツ論の陥穽を見抜いた主張として実に興味深い。

こうなると、スポーツは誰しも「頑張れば」勝利の美酒に酔うことができる(実はこれは幻想に過ぎない——単に資質の問題だけではなく、良好なトレーニング環境を享受しうるかどうかといった勝負の前段階での不平等の問題などもある)という情報の発信と、たとえ敗れてもひとつのことを「頑張って」継続することは素晴らしいという情報の発信とを通して、個々人の主体性や明確な目的意識を喪失せしめる巧妙な社会装置として機能する可能性を秘めることとなる。

そうなると坂上康博ではないが⁽⁵³⁾、スポーツに対して「権力装置としての」という形容が冠されることにもなりかねない。しかも、各スポーツがこうして個々人の主体性、自律性を奪う方向性を志向することになれば、これは各スポーツ団体そのものが権力化することを助長するばかりではなく、それを通して個々人をより大きな権力のもとにひれ伏させる作用を促すことにもなる。

こうなると「体育会系」=当局・権力の「御用機関」といった社会通念が現実味を帯

びてくることとなる。それこそスポーツ（団体）は上記のような意味において、個々人をダブルバインドで縛り上げる権力装置ということになりかねないのである。

おわりに

かつて私が『「頑張り」の構造——日本人の行動原理——』を上梓したころ（1987年）までは、「頑張り」「頑張る」という語に対してはプラスの評価のほうが圧倒的に多く、それへのマイナス評価は僅かだった。

バブル経済華やかなりし頃なれば、それは日本における近代以降の流れのなかで、経済効率が重視され、「頑張れば何とかなる」（＝経済的豊かさを享受できる、社会的地位や名誉を獲得することができる）という幻想が現実の如く思われていた最後の時期だったのかもしれない。

ところが、バブルが潰え去り、日本経済がガタガタになってきた1990年代前半以降、さらに世紀が変わった後においても、「頑張り」「頑張る」という語彙の体する行動のあり方について、少なからぬ日本人がさまざまなかたちで疑問をもつようになってきた。

そのことはしかし、「頑張り」が日本人のコア・パーソナリティーあるいはエトスではなくなってきたこと、もしくは、そうではなかったことを意味するものではない。

そもそも民族のコア・パーソナリティーは、その民族の長い歴史のなかで培われ、発酵してきたものであり、短期間で獲得されたり、喪失するものではない。

日本人のコア・パーソナリティーとしての「頑張り」も、日本の長い〇〇化の歴史、日本文化の周縁性、その地政学的位置、その気候風土等によって醸成されてきたものであり、一時代相のもとでの風俗現象などとは似て異なるものなのである。

昨今、我われ日本人が「頑張る」ことに疑問を持ったり、ペシミスティックになっているとしたら、それはむしろ日本人が自らの内

に宿る、それこそ「核」たる性向としての「頑張り」に明確に気づき、時代状況との絡みのなかで、そのコア・パーソナリティーの功罪、プラス、マイナスを的確に評価しはじめている証拠ということができるかもしれない。

そうした認識・評価のもと、我われ日本人は、これまでのようにともすれば主体性を欠落させ、ただただ「頑張っ」てきた、あるいは「頑張ら」されてきたような方向性を改め、よりよいかたちで「頑張り」を発揮したり、がむしゃらに「頑張る」のではなく、時には「がんばらない」ことを志向するようになるのかもしれない。

今しばらく私は「近現代の語部」として、日本人とその「頑張り」について観察し、考察を加えて行きたいと考えている。

[註]

- (1) 東京新聞、2000年11月6日付朝刊。
- (2) 朝日新聞、同年11月9日付朝刊。
- (3) 東京新聞、同年12月26日付夕刊。
- (4) 同上、2001年1月15日付朝刊。
- (5) 夕刊読売新聞、同年1月16日付。
- (6) 東京新聞、同年2月2日付朝刊。
- (7) 読売新聞、同年2月11日付朝刊。
- (8) 東京新聞、同年2月12日付夕刊。
- (9) 同上、同年2月21日付夕刊。
- (10) 『リビングむさしの』、同年4月7日号（通巻1351号）。
- (11) 読売新聞、同年4月11日付朝刊。
- (12) 朝日新聞、同年7月10日付朝刊。
- (13) 同上、同年7月19日付朝刊。
- (14) 同上、同年7月28日付夕刊。
- (15) 朝日新聞社説、同年9月16日。
- (16) 同上、同年9月26日。
- (17) 同上、同年9月16日。
- (18) 同上。
- (19) これは私の友人で、震災で姉を亡くした人の言葉だが、こうした口吻は関西在住の他の知人親戚の人びとの口からも聞かれた。未知の人たちも異口同音に「何も知らんと、なにが『頑張れ』や」といったニュアンスのことを語ってくれた。私の勤務する大学の学生で、同震災後、被災地にボランティアで行っていた豊田真央も以下のような文章を綴ってくれた。

「……仮設住宅に泊めてもらったり、何度も神戸を訪問したりしてました。その人たちが言っていました。

『いろいろな所から心配して食料をくれたりするけれど、…みんなが励ましてくれるのはわかるけれど、「がんばって下さい」と声をかけられるのが一番、辛かった』って。

『家族を亡くし、家も無くなり、生きていくことだけで精一杯で、限界なくらい「がんばって」いるのに、これ以上、何をどう「がんばれ」ばいいのかわからない』って。

『「がんばれ」って言葉が、…一番、聞きたくない言葉だ』と言ってました。TV局の人も偉い人もみんな必ず最後に『大変だとは思いますが、がんばって下さい』と言っていたそうです。

- (20) 天沼香『『頑張る日本人』再考の時 他者顧みる視点こそ大切』(朝日新聞〈名古屋本社版〉、1995年5月20日付夕刊、文化欄。ちなみに〈東京本社版〉は、『『頑張る日本人』見つめ直す時 国家も個人も他者に何ができるか考えたい』、同年6月2日付夕刊、文化欄)。
- (21) その夥しい事例に関して詳しくは、天沼香『『頑張る』の構造——日本人の行動原理——』、1987年、吉川弘文館、118-126ページ参照。
- (22) 読売新聞、2001年1月14日付朝刊。
- (23) 松原惇子『いい女は頑張らない』、1992年、PHP研究所(原本は1990年、東急エージェンシー刊)。
- (24) 鎌田實『がんばらない』、2000年、集英社。
- (25) 海原純子『どうして「まじめな男」「頑張る女」が満たされないのか』、2001年、大和出版。
- (26) 『灯台』、2001年3月号、第三文明社。
- (27) 『COSMOPOLITAN』コスモポリタン日本版、2001年8月20日号、集英社
- (28) 梶原しげる『『頑張って』なんか大嫌い』、東京新聞、2001年2月6日付朝刊。
- (29) 同上。
- (30) 同上。
- (31) 同上。
- (32) 大学生をはじめとした若者たちとの会話のなかで、少なからぬ彼らが異口同音に語る言葉。
- (33) 同上。
- (34) 深沢夏衣『『頑張る』というコトバ』、『くろすとーく』(地域ミニコミ誌)185号、1998年3月号。
- (35) 王薇『『がんばる』は台風のお陰?』、朝日新聞、2001年9月5日付朝刊。
- (36) 同上。
- (37) 涌井悦子『『頑張れ』って言いたいのに』、朝日新聞、2001年10月22日付朝刊。
- (38) 同上。
- (39) 同上。

(40) 後藤治『『頑張れ』でなく 励ますならば相手に合わせ』、朝日新聞、2001年10月27日付朝刊。

(41) 宇都宮かおり『努力を認めて『頑張ったね』』、朝日新聞、2001年10月27日付朝刊。

(42) 同上。

(43) 君原健二『頑張って下さいと言われると、ガックリときましたね』=『山崎浩子のアスリート進化論』、『週刊文春』、2001年2月1日号、104ページ、文芸春秋社。

(44) 同上。

(45) 同上。

(46) 同上。

(47) 堀内好浩『日本の文化と社会Ⅱ——日本人の行動原理——』、島根大学2001年度シラバス。

(48) 不詳『Fast Break』第52号、2001年5月14日。

(49) 前掲拙著、26-27ページ参照。

(50) 横田匡俊の「燃え尽き症候群」に関する解説を以下に引用しておこう。「バーンアウト(燃え尽き)とは、1960年代のアメリカのヘルスケア領域においては、まったく手の施しようもなくなった麻薬中毒患者の状態を指す言葉であった(稲岡、1988)。それを精神科医Freudenberger(1974)が、医療スタッフにしばしば認められる『長い間の目標への献身が十分に認められなかったときに生じる情緒的・身体的消耗』にその状態を適用し、それを契機に、教師、看護婦、ソーシャルワーカーといった対人サービスを行う職種を対象に研究が進められた。この現象をスポーツ選手に適用し議論されるようになったのは、1980年代後半のことである。そもそもバーンアウトは、症状や一疾患単位を示す言葉ではなく、燃え尽きるといった過程やそのメカニズムを示す概念である。したがって、従来のバーンアウトという概念をスポーツ選手に適用する場合には、その概念的曖昧さを排除するとともに、心理学的ないしは精神分析的概念と区別することが不可欠である…(吉田・松尾1992)。

…様々な角度からアプローチがなされたが、バーンアウトをどう捉えるかという立場は研究者によって様々…。…統一の見解が得られないまま、燃え尽き症候群(バーンアウト・シンドローム)という言葉が一人歩きし、恣意的、意図的に用いられている…(横田2001)。

(51) 横田匡俊『実体なき“燃え尽き症候群”の担った役割：ガンバリズムとの共演～有森裕子選手を手懸かりとして』、<http://www.pu-tokyo.ac.jp/~myokota/arimori.htm>

(52) 同上。

(53) 坂上康博『権力装置としてのスポーツ』、1998年、講談社。